

【翻訳】ゲルト・アルトホフ「デモンストレーションと演出 ーヨーロッパ中世の公共圏におけるコミュニケーションのルール」(1)

Übersetzen und Erklärung : Gerd Althoff, Demonstration und Inszenierung.

Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit

桑 野 聡

Satoshi KUWANO

Dieser Artikel ist eine Übersetzung von Gerd Althoff, *Demonstration und Inszenierung. Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit*, in : *Ders., Spielregeln der Politik im Mittelalter, Kommunikation in Frieden und Fehde*. Darmstadt, 1997. S.229-257. (*Frühmittelalterliche Studien* 27. 1993. S.27-50.). Dieses Manuskript sollte ursprünglich im Jahr 2006 veröffentlicht werden, konnte aber aufgrund der Umstände nicht realisiert werden. Obwohl seit seiner Veröffentlichung mehr als ein Vierteljahrhundert vergangen ist, dachte ich darüber nach, wie wichtig es ist, es auf Japanisch lesen zu können, und hatte die Gelegenheit, es zu präsentieren. Ich danke Prof. Dr. G. Althoff und Prof. Dr. W. Drews für ihre freundliche Zustimmung zur Übersetzung.

【解題】

本稿はGerd Althoff, *Demonstration und Inszenierung. Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit*, in : *Ders., Spielregeln der Politik im Mittelalter, Kommunikation in Frieden und Fehde*. Darmstadt, 1997. S.229-257. (初出は*Frühmittelalterliche Studien* 27. 1993. S.27-50.)の翻訳である。本翻訳は、2002年より東京大学の相沢隆教授の呼び掛けで「ドイツの中世史研究の最新動向を伝えよう」と集まった研究者グループが2007年に出版予定だった翻訳論文集『ヨーロッパ中世史研究の新潮流』に掲載するために用意されたものである。事情によって刊行が実現しなかったが、発表から四半世紀を過ぎた現在でも邦語によってこの論文を読めることには意義があると考え、発表の機会を得ることとなった。

著者ゲルト・アルトホフは、1943年生まれ。ミュンスター大学とハイデルベルク大学で学び、1981年にフライブルク大学で大学教授資格を取得。同大学のカール・シュミートのもとで中世ドイツ国制史・貴族史研究に携わり、祈禱兄弟盟約者名簿やネクロロギウムを用いた実証研究を蓄積した。ギーセン、ボン、ミュンスター各大学の教授を歴任した後、1997年からミュンスター大学教授となり、同大学の初期・盛期中世研究所所長を務められ、名誉教授となった現在も精力的な研究活動を展開している。90年代からは「儀礼・象徴・コミュニケーション」に着目して、中世社会の政治的構造の特徴を明らかにし、従来のドイツ国制史研究の構築した「中世像」

の再検討に積極的に取り組んでこられた。その旺盛な研究活動は欧米諸国にとどまらず、2004年10月9日には私たちの研究グループが準備した東京大学駒場キャンパスにおけるシンポジウム「ヨーロッパ中世史研究の新潮流」、および翌日の東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)主催「ヨーロッパ中世史国際シンポジウム 新しい中世像を求めてー西洋文化における他者の生成」の招待を受けて日本にも来日した(シンポジウムの記録はhttp://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/d_041010.html)。近年の研究活動は、Althoff, G. *Spielregeln der Politik im Mittelalter. Kommunikation in Frieden und Fehde*, 2. um Nachwort ergänzte Aufl., Darmstadt 2014 ; Ders., *Kontrolle der Macht. Formen und Regeln politischer Beratung im Mittelalter*, Darmstadt 2016. などにまとめられている。

また同氏の翻訳には『中世人の権力ー「国家なき時代」のルールと駆引』(柳井尚子訳、八坂書房、2004年)、「中世盛期の戦士貴族社会における紛争ルール」(服部良久訳、笠谷和比古編『公家と武家の比較文明史』思文閣出版、2005年)、「紛争行為と法意識ー十二世紀におけるヴェルフェン家」(服部良久訳、同編『紛争の中のヨーロッパ中世』京都大学学術出版会 2006年)がある。また本論文の紹介を意図した政治的コミュニケーションと儀礼、中世の公共圏などの注目すべきテーマに着目して、アルトホフとその後の関連研究領域の動向を邦語で伝える最良の文献として、服部良久『中世のコミュニケーションと秩序ー紛争・平和・儀礼』(京都大学学術出版会 2020年)所収の諸論文、特に第1章「ヨーロッパ中世史研究における「コミュニケーション」」1～25頁を参照することを推奨する。

アルトホフは本論文で、中世の限定的な公共圏において人びとが言葉以上にコミュニケーション手段として象徴的・儀礼的な行為を重要視していたことを指摘し、そこに近代社会とは異なる独特な秩序維持のための行動ルール(Spielregeln)が存在することをハインリヒ1世とシャルル単純王とのボン条約締結、コンラート2世の国王即位式の事例やオットー3世のティボリ包囲、ハインリヒ4世のカノッサ事件、フリードリヒ・バルバロッサとイタリア都市との紛争の仲裁・降服・和解の結びつき過程などを例に解説する。更にこれらの公然での「見せつける」行為(Demonstration)の前提として、事前の打ち合わせの存在を確信し、第2回十字軍への参加をめぐるエピソードなどを例に「演出」(Inszenierung)の問題に言及する。明文化されない行動文化の分析には少なからず困難が伴うが、アルトホフは現在もなお自ら修正点を模索しながら、この遠大なテーマに取り組んでいる。それ故、同氏の本論文に類似する著作は多数あり、それらが相互補完の関係にあったり、後に修正が加えられたケースも見出すことが出来る。本論文は今となっては決して最新のものではないが、そうした中で彼の中世社会における公的・政治的なコミュニケーションの在り方に関する全体像を概観するに最も適したものと判断して翻訳を試みた次第である。また本論文も所収するアルトホフの研究意図を理解する上で重

要な論文集 *Spielregeln der Politik im Mittelalter*, については、西川洋一氏の紹介(『(東京大学) 大学院研究年報』第116巻9・10号、2003年、157～161頁)も参照されたい。加えて、近年の関連研究領域との関係については、上記の服部良久氏の研究と共に以下の日本の論文も有益である。西川洋一「中世前期のレーン制に関する研究動向ー西洋法制史」(『国家学会雑誌』128-5・6、2015年)、同「『パフォーマティブ・ターン』の中の中世国制史」(『国家学会雑誌』131-1・2、2018年)。

最後に、お蔵入りしていた原稿を日本における中世史研究のために活用することをご助言いただいた大妻女子大学名誉教授の森義信先生に感謝申し上げたい。そして2004年の来日の際にご挨拶して以来の唐突なお願いにも拘わらず、アルトホフ教授は迅速で丁寧なお返事を頂き、現ミュンスター大学初期・盛期中世研究所所長ヴォルフラム・ドリュース教授に連絡して頂いて今回の翻訳論文の公表に対して快諾をいただいた。お二人のご好意に、改めて心より感謝申し上げます。

尚、本論文は1回での掲載を希望したが分量規定によって叶わなかった。それ故、今回は本文部分の翻訳のみの掲載となり、次号に詳細な註を別途掲載予定となったことをご了解いただきたい。規定を越える翻訳論文の掲載を検討いただいた郡山女子大学紀要編集委員会の皆さまのご配慮に感謝申し上げますと共に、読者の皆様には一部不便をお掛けすることとなることをお詫びしたい。

【翻訳】

この論文の題名には、普通ヨーロッパ中世には用いられないさまざまな概念が一堂に集められている¹。ユルゲン・ハーバーマスやルキアン・ヘルシャーの説を信じるならば、ヨーロッパ中世には公共圏(Öffentlichkeit)とは全く存在しないか、あるいは存在したとしても限られたものに過ぎなかった²。国家的権力の担い手たちを持続的に統制することに努め、その権力に真っ向から向き合う形で存在する「社会を秩序づける原理」と解される公共圏とは18世紀以前には存在せず、それが啓蒙思想から生み出されたものと言うことは、ハーバーマスたちにおいても、また他の場所でも読むことが出来る³。ヨーロッパ中世には、ただ「代表的具現の公共性」(repräsentative Öffentlichkeit)というものを見出すだけだ。そこでは「封建的権威の威光」が「人民」(Volk)に見せつけられ、彼らの権威を人民にしっかりと認識させる効果をもった⁴。だからこそ、この「見せつける」(Zur-Schau-Stellung)という機能と、ヨーロッパ中世における政治的コミュニケーションとの関係が問題となるのだ。

確かに政治的コミュニケーションの担い手と形態が中世と近代で同じままだとまでは、主張することができないだろう。しかし、しばしば史料中に確認される内々の空間(Vertraulichkeit)、いやむしろ内密とさえ言うことができる圏域と並存する公の場というもの

の存在は疑いを容れない⁵。そして、宮廷会議、部族集会、教会の重要な祝祭や国王選挙といったこの中世の公共圏においてなされ、そして確かに別の地平でもまたなされたコミュニケーションは少なからず政治的なものだったが、事情によっては高度に政治的でさえあった。但し、そのコミュニケーションは、公に意見が戦わされ、問題が言葉による対決と論拠の重みを通じて解決に導かれる討論によって必ずしも特徴づけられるものではなかった。

ヨーロッパ中世という時代にあつて公の場では、むしろ言語を用いないコミュニケーション行為が優位を占めていた。我々が儀礼やセレモニーという概念で呼ぶ行為の中で何かが示され、見せつけられ、具体的に表現されたのだ。そうした行為の例には、修道院や都市への荘重な国王の入城式(adventus・Entrées)と彼らの儀式張った出立⁶、厳粛な叙任式、我々にはおぞましい国王廃位の儀式⁷、教会に出入りする際の行列があり、支配者集団の序列がそこにおいて表現された⁸。酒宴と祝宴もそうで、そこでは同じことが行われ、あるいはまた参加者の同格性が誇示され、平和と友好の樹立と持続が示されると共に知らしめられた⁹。国王や聖俗権力の担い手たちといった中世の有力者たちの活動を概観するならば、彼らは、私たち現代人が「政治的コミュニケーション」と理解しているもの——それは、まずもって言葉による行為と考えられているが——よりも、そうした行為によってはるかに強く規定されている。勿論、中世の公共圏においてもまた言葉は使われていた——例えば、臣下による助言(*consilium*)を想起できる。これは、彼らにとって最も重要で気高い仕事のひとつであり、原則として公的に行われた¹⁰。しかしながら、中世において言葉による意志の伝達は、公的なコミュニケーションの中心ではなかった。レプレゼンタツィオン(Repräsentation)を——これは代表の意味ではなく「見せつける」という意味で——中世の公共圏において、支配や統治の担い手たちの行動は目指した¹¹。しかし、この事実の発見で立ち止まっているわけにはいかない。この種のコミュニケーションの機能とそれがいかなる役割を果たしたかが問われなければならない。

この種のコミュニケーションの機能と働きを問おうとすると、作法・習慣・慣例・風習・規則に関する識見を得ること——簡潔に言えば、この分野で適用され、守られたり破られたりし、あるいはまた変更されたルールを研究するという——に向かわざるを得ない。率直に言えば、こうした目論みは相当な範囲を研究対象とすることとなる。というのは、身ぶり・仕草・儀礼・セレモニーといったものが、中世の生活のあらゆる領域で表れてくるからで、修道院や教会の領分でも世俗におけると同様の頻度で遭遇する¹²。また中世の法秩序も、この秩序の根本的な構成要素であった法儀礼的・法象徴的な行為によって特徴づけられていた¹³。しるし・シンボル・行動のパターンによる複雑なひとつのシステムを中世の人々は自由に用いていた。このシステムによって中世人は、言葉を使わずに地位・身分・階級、友好関係と歓喜・敵対関係と憤懣といったその時々相手の相手に対する関係を表現できたのである。これは一般に知られていることであり、そして20世紀の人間がこの潜在能力を、たとえ異なった形であれ、更に引き

続き利用していることは言うまでもないことである¹⁴。従って、中世史研究においても多くの先駆的研究が存在する。想起されるべきは、パーシ・エルンスト・シュラムの『支配表象と国家象徴』、ハインリヒ・フィヒテナウ、ジャン・クロード・シュミット、あるいはジャック・ル・ゴフの諸研究、カール・レイザー、ジャネット・ネルソンやジョフリー・コジョルによる英語圏の研究である¹⁵。それにもかかわらず、そうした諸研究は、とりわけドイツの中世研究においては、実際にはほとんど定着してはいない。その際、上述したルールに関する知識の欠如と無視が時代錯誤的な判断を助長していることは明らかである。遠く過ぎ去った時代における行動の枠組みとなる諸条件を研究テーマとしない者は、十分に考えることもなく、諸条件を今日と同じだと見なす危険を冒す。これは危険な誤りと言えよう。それゆえ、行動の枠組みとなった諸条件が研究され、判断の際に尊重されねばならないことは明らかであろう。むしろ問題なのは、その方法である。なぜならば、以下のことは確かだからである。ここで問題とするルールは、規範的資料ではどこにも文字に書き留められてはいない。むしろ、このルールは具体的な事件や出来事の描写から推論されなければならず、それは決して容易なことではないのである。

ここではそれ故に、この広範な領域に対する全般的な概観ではなく、このテーマのひとつの、しかし中心的な観点に焦点を絞ることが求められる。論述の中心には、どのように中世の公共圏でこれらのしるしや行動様式がデモンストレーションと演出にまとめられたのか、という問題が据えられる。演出の中では中世における支配の表象が本当は行われていた¹⁶。特定の事柄のデモンストレーションと演出は——言葉による告示ではなく——、中世において決定を公にする場合のより重要な形態だった。これを理解するには、表象と見なすことが出来る幾つかの事例を詳しく紹介しなければならない。まず、国王推戴という枠組みでの演出を見てみよう。

国王に選出された後、国王聖別式に向かうザーリアー朝の創始者コンラート2世の前には、一群の邪魔者たちが立ちはだかった。これについては、彼の伝記作家ヴィーボが詳述している¹⁷。マインツ大聖堂での聖別のための行列の途上、特別な願いをもった人々が彼の行く手には待ち受けていた。まずマインツ教会のある農民が、続いて一人の孤児が、そして三人目には未亡人が、戴冠のための行列を引き止めたのである。コンラートに付き従う諸侯が先を急ぐようにせき立てたにもかかわらず、彼は立ち止まり、三人それぞれに公平に接して話を聞いた。更に数歩進むと無実にも拘わらず故郷を追放されたと訴える者が国王の足を止め、行列はさらに遅くなった。コンラートはその手を取ると彼を玉座まで連れて行き、そこで諸侯の一人にこの件の処理を委託した¹⁸。コンラートが乗り切らねばならなかった試練は、これでも終わらなかった。教会ではマインツ大司教アリボが、訓辞を長々と語って聞かせ、コンラートにキリスト教の君主としての責務を想起させたのである。訓辞の終わりに大司教は、以下のような非常に具体的な話をした。「それでは国王陛下、聖なる教会全体は我々とともに、これまで汝に罪をはたら

いたり、何らかの無礼によって汝の恩恵を失ったすべての罪人に対して汝の恩恵を請う。汝に無礼を働いた高貴なるオットーもまた、その一人である。彼とその他のすべての罪人に対し、我々は汝の寛大な振る舞いを請い願う。本日、汝を新しい人間とした神の愛の故に、彼らを許したまえ……。』更にヴィーボは以下のように語っている。「この訓辞を聴く間に、憐れみから心打たれた国王は溜息をつき、筆舌に尽くしがたいほどの涙を流した。その後、司教や大公たち、そしてすべての人民の求めに応じて、彼に背いた者たちの罪のすべてに許しを与えた。国王の紛うことなき敬虔さを目の当たりにして、全員が嬉しさのあまり声をあげて泣いた¹⁹。」ここで自発的に国王に近づいたように見える貧者や未亡人、孤児たちは、あたかもカロリング朝期の君主鑑から現れ出たかのようである。というのも、そこでは、まさにこの人間集団に属する者たちが、特別な方法で国王の寛大さと公正さに委ねられているからである²⁰。三人が独断で彼らの運命を切り開こうと戴冠行列を引き止めたなどとは、とても考えられない。むしろ彼らは、コンラート2世が君主として彼の能力を示し、寛大さと公正さを証明する対象なのだ。このことは、思いがけずに新国王の恩赦を贈られたように見える高貴なオットーについても言える。コンラート2世にとってこれらの試練は、ほぼ間違いなく予期せぬことではなく、むしろそれらは国王との申し合わせ事項だったのだ。言い換えれば、あらかじめ綿密にその行動のひとつひとつが決められていた演出だったのである。それらは、その結果と成果がわかっているのに、自発的な行動のように実行されたのだった。

こうした解釈はどうして出来るのだろうか。事前の許しを得ずに国王へ願いを伝えることは明らかに不可能であり、少なくとも滅多に行われなかったのだが、上記以外の事例でこの行為が、どれほど内々で隠密裡に準備されたのかを詳しく説明しなければ、この解釈の正しさを説明することにはならないだろう²¹。そのように非公式に国王に接近できなかった者たちの憤慨は様々に証明される。そしてこの彼らの憤慨は、準備なしに国王——あるいは王以外の主君の場合でも——に願い出ることが重大なルール違反を意味していたことを証明する²²。しかしながら、この事情については指摘するだけにとどめ、前述の解釈を裏付けるために比較可能で特にこれまでの成果が豊富な研究領域を取り上げたいと思う。中世における降伏の儀礼に関する研究領域がそれである²³。ここでもまた常に、自発的な行動であるかのように見せる演出が行われていた。コンラート2世の国王登極時とは異なって、降伏の事例はさまざまであり、その多くから儀礼の細目が事前に決められていたこと、そしてその細目がどのようなものであったかを知ることが出来る。降伏儀礼は、それが中世における紛争の終結に中心的役割を果たしたが故に、非常に頻繁に確認できるのである。この儀礼は通例、できる限り多くの公衆の前(Öffentlichkeit)で催されたが、これには十分な理由があつてのことであつた。つまり、敵対者の降伏は、勝者にとって紛争でこうむった被害の補償を意味し、この「補償」(*satisfactio*)こそが、紛争を終結させる機能に他ならなかった。ゆえに降伏儀礼を見る公衆の数が多ければ多

いほど、補償の効果はそれだけ大きくなったのである²⁴。

論述のはじめに多くの事例の中のひとつを詳細に紹介して、史料においてそうした儀礼がどのように描かれているのかを見てみよう。1001年に皇帝オットー3世は、ローマ近郊の都市ティヴォリを包囲した。ヒルデスハイム司教ベルンヴァルトは皇帝の軍にあって包囲に参加し、その際に少なからぬ活躍をした。そのため、彼の伝記にはこの包囲に関する詳細な記述が見出される²⁵。伝記に従えば、ベルンヴァルトは皇帝に以下のような助言を与えた。

「故郷に帰りたいのはやまやまだが、神の恩寵によって都市とその住民たちが皇帝の足下に平伏すのを見るときまで、私はここから離れないだろう。」(そして彼がそう伝えた結果、オットー3世は包囲をいっそう強化した。その後、以下のことが生じた。)[数日後、ベルンヴァルトと教皇が市門の前に姿を現した。神の僕たちが近づいて来ると、市民たちは彼らを丁重に受け入れ、彼らを懇慫に市内へ招き入れた。しかし平和の使者たちは、神の助けによって市民全員が皇帝の要求に沿った平和を受け入れるまで、一步も引かなかった。後日、司教たちは記憶に残る凱旋行列を引き連れて皇帝のもとに立ち戻った。というのは、すべての名望ある市民たちが付き従ったからである。彼らは腰布(Lendenschurz)だけを身につけ、右手に剣、左手に鞭を携えて宮殿にやってきた。彼らはその全財産を放棄し、何も要求せずに、命すらいらないと皇帝に語り、皇帝が有罪と見なす者の首を斬っていただきたい、もし哀れんでいただけるなら、その者をさらし柱に繋いで鞭でさんざんに打っていただきたいと嘆願した。皇帝が市壁を撤去させようと望むならば、市民たちはこれを自ら進んで実行するし、今後皇帝陛下の命令には一生逆らわないと述べた。皇帝は平和の立て役者である教皇と司教ベルンヴァルトに対して目一杯の最高の賛辞を贈り、そして彼らの願いで敵だった市民たちに恩赦を贈った。話し合いの結果、都市を破壊しないことが満場一致で決議された。住民は、再び皇帝の寵愛を受けるようになり、平和を守り皇帝から二度と離反しないように強く訓戒された²⁶。]

一見すると、報告はとくに信用するほどのものではないように見えるが、いずれにしてもこの話は、報告と似たようなかたちで進行した可能性が比較的高い。つまりこの話は、中世の長い数百年間に成立した大量の降伏譚——そこには細目まで全く同じものもあれば、ほとんど類似のものもある²⁷——のコンテクストの中に位置づけられるのである。個人や軍隊、あるいはある都市の代表者は無条件に降伏し、争いの勝者のもとに裸足でやって来て、結果がどうだろうと己の身を委ねた。細かい点では部分的に異なっていたものの、降伏には確固たるルールが存在していたのである。相応の服装というものもそのようなルールのひとつだった。敗者は贖罪者の服装や腰布を着用して裸足で現れ、剣を首に当てたり、鞭を手に携えた。これらの剣や鞭によって罪が償われるのである。相手の前で地面に平伏して彼の足下に屈すると、「汝の好きにするがよい」というような意味の何か儀式めいた言葉を口にした。そのような場面を印象的に描く叙述はいくつもある。例えば、12世紀のフリードリヒ・バルバロッサとミラノの間の

戦い²⁸、11世紀のハインリヒ4世へのザクセン部族の降伏²⁹などである。10世紀にしばしば見られるのは、国王の敵対者たちが教会に参詣する君主に人知れず近づき、衆人の前で足下に平伏して憐れみと許しを懇願したことである³⁰。降伏した者は即座に許され、地面から抱き上げられて接吻された。降伏儀礼が行われ——明らかに頻繁に実践されたようだが——、勝利した相手がミサへ向かう途上だったならば、その後一緒に教会に入り、共にミサを祝った。

しかし、降伏した者が拘留されたり、追放されるということもまた生じた。程度の差はあれ、拘留される者は丁重な扱いを受けた——最も好意的な場合には、拘留はほとんど象徴的な性格しか持たず、ほんの短期間で終わった。そうした拘留の終了を知らしめる作法については、後述しよう。降伏のしるしと見なされた別のさまざまな行動もまた、事情によっては象徴的な性格を持っていた。城塞の破壊が城壁の一部だけの破壊に限定されたり³¹、1188年にフリードリヒ・バルバロッサがケルン市民と和平を結んだ際に契約として取り決めたように、以下のことが合意されたのもまた、象徴的な意味を持っていた。「ケルン市民は、市門のひとつを丸屋根にいたるまで破壊し、四ヶ所の濠を400フィートの長さにわたって埋める³²。」ケルン国王年代記がバルバロッサとの協定を引用する限りでは、更にこう続いている。「しかしこの件については、もし彼らが望むなら、この防壁を後日以前の状態に修復することが出来ると和らげられた。そして修復は実行された³³。」ここでより大切だったのは、他の事例と同様に、都市の防御施設の長期的な弱体化よりも、勝者に満足感を与える視示的な身ぶりの方だった。しかし我々の問題設定にとってとりわけ重要なのは、降伏の儀礼の事例において、行動のすべての細目とその結果が事前にしっかりと決められていたことをうかがわせる文言に頻繁に出くわすことである。こうした任務を請け負っていたのが調停者たち (*mediators*) であり、彼らの役割は演出を行う監督と言うことが出来よう。彼らは手順と個々の行動を討議して決め、宣誓をして関係者にすべてが申し合わせ通りに運ぶことを保証した。もっともこの過程が公にされることはほとんどなく、普通は協議された取り決めに対して意見の不一致がある場合にだけ明みに出た。例えば、シュピーアにおいて1075年にザクセン部族が降伏した後、国王ハインリヒ4世が取り決められた協定に反してザクセンの有力者たちを拘留したとき³⁴、あるいはまた、これと同じ君主とオットー・フォン・ノルトハイムの和平締結が極めて困難な状況になったときがそうであった。こうした場合に史料は、調停者がどのように活動し、話し合いの場でどのような申し入れをしたのかを比較的詳細に語ってくれるのである³⁵。常に高位の者で、国王自身であることもしばしばであった調停者の威信は、原則としてルールの遵守を保証するに十分であった。

ここで述べてきたことを、ある有名な降伏儀礼の事例に即して更に具体的に述べてみよう。もとより、これに関する研究はティモシー・ロイターのものだけだが、彼はこの事件が「降伏」(*deditio*)の伝統の中で検討されなければならないことに注意を促したのであった³⁶。この事件とは、ハインリヒ4世の「カノッサ行」のことであり、とりわけドイツ人の歴史意識に深く刻み

込まれた劇的なあの場面で最高潮に達する降伏行為である。国王は裸足で悔悛の衣装を纏い、三日間に渡って許しとキリスト教共同体への再度の受け入れを嘆願した³⁷。この行動は教会の贖罪の伝統からではなく、「降伏」(*deditio*)の儀礼からの方がよりよく理解できるということを、最も重要な史料の記述が非常に明確に示している。事件の成り行きについては、二つの異なった見解を区別することが出来る。ひとつは、ランペルト・フォン・ヘルスフェルトの国王側の証言である³⁸。彼は調停者の働きを強い調子で詳細に叙述している。中でも、トスカナ辺境伯マティルダ、ハインリヒの義母トゥリンのアーデルハイド、クリュニー修道院長フーゴー、エステ辺境伯アッツォが調停者として際立っている。彼らは免罪の条件について教皇と協議し、ハインリヒ4世によるこの条件の遵守を保証した。彼らの主張には重みがあり、また彼らが粘り強く主張したため、グレゴリウス7世は提案された手順——まさしくあの悔悛行(*Bußgang*)——を受け入れ、その結果ハインリヒ4世は破門から解放されたのだった³⁹。それゆえ、ランペルトの記述に従えば、すべての行為は前もって取り決められており、その道筋は確定していたのだった。調停者は、二人の主役に相応しい行動を保証していたのである。そうしたことはたびたびあったから、慣例どおりだったと言うことが出来る。

これに対して、事件に関する自身の見解を大司教・司教と帝国の有力者のすべてに書簡で伝えたグレゴリウス7世の叙述は、若干異なっている⁴⁰。まず彼は、適切な「補償」(*satisfactio*)について交渉するための使節をハインリヒ4世が彼(教皇)に送ってきたことを認めている。また彼は幾度も使節が行き来し、相当に詰めた交渉が行われたことをも認めている⁴¹。しかし彼は——この点がランペルトと決定的に異なるのだが——、彼が申し出をその度ごとに退けたと記している。教皇によれば、こうした状況下でハインリヒ4世が突然裸足で毛織りの衣装を纏って城門の前に現れ、そこで三日間辛抱したのである。それによってハインリヒ4世は、居合わせたすべての人々に哀れみの気持ちを抱かせ、自分の破門を解くよう教皇にせがませたのであった。この圧迫に教皇は抗しきれなかったと言う⁴²。ランペルトの叙述との相違は明白である。後者(ランペルト)では、行為の申し合わせと結果を保証する演出とが描かれていたのに対し、前者(グレゴリウスと彼に倣った他の叙述)では、ハインリヒ4世によるルール違反に関する報告が核になっている。つまり、教皇の主張では、彼(ハインリヒ4世)は交渉の結果をあらかじめ見越して、申し合わせなしに「補償」(*satisfactio*)を企て、それによって——きつと十分に計算した上で——教皇に圧力をかけたとされる。その圧力の強さゆえ、教皇は——彼自身の政治的意図に反して——国王が望んだ免罪を与えなければならなかった。真実はどうだったのかはここでは決められないし、また決めるべきでもない。我々の問題関心にとっては、むしろ以下のことがより重要である。すなわち、二つの見解はともに、「降伏」(*deditio*)や「補償」(*satisfactio*)の詳細が話し合われたこと、そして討議されて決定された内容が、その後実行されなければならなかった、という点では同じ見方をしていたということである。事前にすべて

をきちんと申し合わせることもなく、また代償に関して合意することもなしに降伏行為を実践し、この分野のルールを破ることもできた。そうした事実を、我々は他の事例からも知っている⁴³。グレゴリウスが「補償」(*satisfactio*)を受諾する用意がまだないうちに、ハインリヒ4世が教皇をカノッサで事実上既成事実を作って逃げられない状況下に立たせたというのは十分にあり得ることである。

カノッサ事件の終わりには、主役たちによる宴会が催され、それが両者の和解の証となった⁴⁴。一緒に食事をとることは、一種の慣例行事と見なされていたのであり、中世においてその「見せつけ効果」(*demonstratives Potential*)は、さまざまな観点で用いられた⁴⁵。宴会はまさに中世の公共圏において相当に重要なコミュニケーションの手段であったから、ここで若干補足しておかなければならない。一緒に食事をする、おそらくもっと重要なのは一緒に飲むことだが、それらは平和的で友好的な関係を結ぶ用意のあることを相手に示した。それ故に、中世の集団生活における「宴会」(*convivium*)とは儀礼的・視示的な場だった。それはある種の結合関係や同盟関係、勿論また同盟をも意味する友好関係、あるいは仲間関係(*Genossenschaft*)といった結びつきのはじまりだった。そしてさまざまな集団の共同生活の中には、常に宴会が存在していたのである。この点についてもまたひとつの具体例に即して明らかにしてみたい。その事例からは、同盟関係の締結に際して儀礼的・視示的なさまざまな行為があったことが浮かび上がってくる。

11世紀後半にイオクンドゥスなる者が、マーストリヒトでとりわけ崇拜されていた聖セルバティウスの奇跡伝を書き記した⁴⁶。この関連で彼は、西フランク国王ロータルと大公ハインリヒの間の同盟についても言及している。この同盟はケルンで結ばれ、国王ロータルがロートリンゲンを大公(*dux*)ハインリヒに委ねたというものであるが、学界の通説ではこれは、シャルル単純王と国王ハインリヒ1世の間で921年に結ばれたボン条約のことを取り違えたものであろうと考えられている⁴⁷。間違いや不正確さは、しかしながら我々の問題設定にとってこの話の価値を損なうものではない。イオクンドゥスは、以下のように会見と同盟の様子を記している。「彼らが誠実と愛の証をもって参集したということを示すために、彼らは相互に素晴らしく高価な贈り物をした。しかし、大公の方がより大きくて素晴らしい贈り物をした。それというのは、彼の方が財産や家臣の点でも西フランク国王よりずっと豊かだったからである⁴⁸。」ただし、若干指摘しておかなければならないが、贈り物の交換に際しては「強者がより豪華な贈り物をする一方で、自分に送られた物からは僅かしか手にしない」というのが、よく見受けられるルールである⁴⁹。本来ならば下位の身分の者としてより多くの贈り物をするなど許されなかった大公(*dux*)の行動が示すように、こうした方法で自分の地位を示すことも出来たのである。作者は更にこう続ける。「大公がそれほどまでに強大であったにもかかわらず、彼はまるで賤民でもあるかの如く、彼(つまり国王)にへりくだった態度をとった。国王の軍隊はこ

の様子を見て非常に喜んだ⁵⁰。」恭順の意を示した振る舞いがどのようなものであったかは具体的に述べられていないが、従者たちはそれを見て理解したのだった。おそらくそれは、手を取っての接吻、片膝をつくようなものであったかもしれないし、単にお辞儀しただけだったのかもしれない。

ケルンから後、エーヌ川までは一緒に移動した。この行列の際に、大公(*dux*)ハインリヒは国王の太刀持ち、彼の長男オットーは国王の盾持ちを演じた。この儀礼的な奉仕によって、彼らは国王への恭順の意を公にしたのだった。その後、彼らは河畔に三日間共に滞在した。「彼らは寝食をともにした⁵¹。」彼らはこのように共同生活をして見せたのだった。トゥールのグレゴリウスは二人の交渉相手が一つのベットで眠ったという同じような事例を伝えているし、寝食を同じ家で行ったことを伝える他の事例もある⁵²。この儀礼的・視示的な行為の後に——話は更に続くが——、国王は大公(*dux*)にロートリンゲンを授封した。そしてその後に彼らは「キリストに従順な兄弟や友人、親類のような忠誠と本当の平和の中で」(*cum pace et fide non ficta, ut cognati, ut amici et fraters in Christo devotissimi*)別れた。この別れにもまたしるしがあった。両者が滝のような涙を流すというのがそれである⁵³。

勿論この話は、ことと次第がこの通りに行われたことを示しているわけではないが、同盟締結や授封のための会談というものが11世紀にどのようなものとして考えられていたのかを知るには十分である。つまり会談は、見せるという行為から徹頭徹尾作り上げられていた。この行為によって、当事者が相互の関係をそれまでどのように秩序づけ、今後どのように作り上げようとしたかを、とりわけ軍隊に、そして同時に衆人に見せたのである。従属関係や平和的態度、友好関係を表現するためにはしるしが存在していたのである。またきっと存在していたであろう交渉、要求や談合については、この話(=奇跡伝)の中では言及されていないが、それはこの著作だけに限らない——それらは[まったく別の]内々(*Vertraulichkeit*)の領域に属していたからである⁵⁴。

ただ付け加えておきたいのは、主に国王の宣誓文と同席した有力者たちの署名を伝える921年のボン条約のテキストの中に、この友好条約が結ばれる際の儀礼的行為に関する申し合わせについてのヒントが含まれているということだ。事前交渉について伝える短い叙述の中に注目すべきことが見出される。それによれば、二人の国王はボン近郊のライン河畔にやって来ると、前もって交渉人たちが申し合わせていたかのように、それぞれ川の兩岸に陣取り互いににらみ合うことで最初の一日をもっぱら過ごしたという⁵⁵。この申し合わせは、双方の信頼を築くための措置と考えてほぼ間違いないだろう。国王たちがライン川の真ん中に停泊した船に乗り込み、彼らの友好同盟を結ぶ前段階において、この措置はきっと重要だったのである。境界となる川の真ん中に船を繫留することはよく行われたことだったが、それはまたやっておかなければならない必要な作業でもあった。それというのも、どちらかが対岸に行けば、その人の体面

が損なわれることとなり、そのようなことをいずれの側も望まなかったが故である⁵⁶。

和解や友好を示すための宴会や他のデモンストレーション的行為についてはここまでにして、降伏の儀礼に話を戻そう。「補償」(*satisfactio*)というものには、降伏儀礼だけでなく、敵対者の拘留も少なからず含まれていた。他のことと同様に、その期間は調停者によって交渉で決められ保証された。それゆえ、演出に基づく中世のコミュニケーションを評価するには、そうした拘留がどのようにして終わらされるかという手段とやり方が重要である。先に引用した高貴な出自のオットーに許しを与えるようにコンラート2世に訓戒したマインツ大司教アリボの説教は、特殊な例ではない。司教たちが国王たちに公式の説教の中である特定の囚人を解放するように訓戒する事例を我々はたくさん知っているが、そうした場合、その願いは涙を流しながら認められるのが常だった。この囚人の解放は、教会の大規模な祝祭日の祝祭ミサの折に行われることが多かった。例えば皇帝ハインリヒ2世は、マリアの誕生祭の日に、彼の相談役にして師であったフライジング司教ゴットシャルクにミサ曲を歌い、説教を行うように求めた⁵⁷。司教は主君へ公式に訓戒を行える機会を利用して「彼(皇帝ハインリヒ2世)が存命中に・・・尊敬と成功のうちに受け取ったもののすべては、自身の功績以上に神の恩恵に帰するものである⁵⁸」と語った。更に彼は、「救済のための唯一の方法たる慈悲について」語り、皇帝が辺境伯ハインリヒ・フォン・シュヴァインフルトを拘留から解放することにこの慈悲を用いるよう彼に促した。これを受けてハインリヒ2世は、訓戒を受け入れることを誓約したのだった⁵⁹。ハインリヒ4世の相談役であったハンプルク・ブレーメン大司教アーダルベルトは、ハインリヒ4世が大公オットー・フォン・ノルトハイムに再び寵愛を与えるまで、その主君にかなり長時間にわたって懇願し続けたが、それはミサの間と聖霊降臨祭の際に行われている⁶⁰。

ここであらためてどうしても論じておかなければならないのは、これらの事例において国王はほとんど何も知らされていなかったのかという問題、すなわち彼が本当にまったく予期していないことが訓戒されたのかという問題である。そうした決定が内々に(*Vertraulichkeit*)なされるとするならば、事前情報なしに、より適切には伝言なしにそうした訓戒というものが国王に伝えられたとは、恐らく考えられない⁶¹。むしろ、次のような別の解釈の方が説得力がある。いずれにせよ決定されている拘留者の釈放を国王の寛大さを誇示するために利用したのである。この行為は演出されたものであり、さめざめと流される涙などは行動の儀礼的構成要素なのだ。

こうした観点から見ると、ハインリヒ4世の「カノッサ行」とほとんど同じくらいに有名な、あの場面もまた新たに解釈されるだろう。シュパイアーにおける1146年クリスマスのあの出来事のことである。その時、クレルヴォーのベルナルドは公式の説教によって、それまで乗り気でなかった国王コンラート3世に十字架を取らせることに、つまり第2回十字軍に参加させることに成功した⁶²。有名な説教者の言葉の威力によって——今日でもそう理解されている

が——国王はその宗教的感情をもはや抑えられなくなり、政治的にはどう考えても賢明とは言えない方向へ動かされたといわれる⁶³。バイエルン、ザクセンの両大公領の問題をめぐるヴェルフエンとの長く続く紛争を前にして、長期間本国を不在にすることは、シュタウファーにとって実際には問題だったはずである。クレルヴォーのベルナルの説教はこの点で、きわめて重要な状況下では宗教的な駆動力を前に現実政治的な考慮が後退することもあり得た、ということを見事に示している。中世の人々に対する聖職者の影響を、否それどころか聖職者の力というものが、ありありと目の前に浮かんでくる。しかしながら私の考えでは、中世の人々にとって宗教的駆動力がもっていた価値の大きさは疑問の余地がないとしても、描かれている場面を自発的な行為と見なし、他にも例のある中世の演出という次元で見ないとしたら、それは誤りである。

同年のクリスマスの祝祭で、コンラート3世の主たる政敵であったヴェルフ6世が遠くバイエルンのパイティングで同じように宗教的感情を抑えられなくなり、国王と同様に十字軍への参加を約束したことは、確かにもう当時からいぶかしがられたはずだ⁶⁴。現実政治的な問題は、ヴェルフ6世とコンラート3世が同時期に十字軍に参加したために、事実上まったく先延ばしされた。実際に史料の述べるところでは、国王の決心に先立って、コンラート3世の十字軍参加を可能にする解決策をめぐって数週間に涉って綿密な交渉が行われた⁶⁵。クレルヴォーのベルナル伝には、交渉の後に国王が翌日に決意を表明することを予告していたことが、明確に述べられている⁶⁶。これに対して、更に続けられた申し合わせについては一言も述べられていない。叙述が強調するのは、むしろ決定をめぐって表面化した国王とベルナルの間の確執である。ベルナルは、決定の日にあらかじめ国王を説教攻めにし、コンラート3世に対し、彼が最後の審判に臨んで弁明をしなければならないと迫った。キリストが審判の場で彼に「私が汝のためにしてやらなかったことが何かあろうか」と問うであろう、と。王冠・富・思慮深さ・健康・その他多くの主の恩恵が列挙され、漸くコンラートは譲歩した。そして彼(国王)は皆の前で「余は、彼(ベルナル)によって戒められ、今や神に仕える所存なり⁶⁷」と宣言したのだった。この場面はベルナル伝の中でも劇的で、確かに印象深く描かれた箇所であり——ただしそれは、他にも例のある説教による訓戒の伝統を踏襲しているだけである——、ハインリヒ2世、コンラート2世、そしてハインリヒ4世もまた公式の説教の中で訓戒を受け、その訓戒が要求したことを涙を流しながら実行に移した⁶⁸。こうした考察や同時期のヴェルフ6世の心変わり、シュパイアーの場面が既に事前に申し合わせた決定を効果的に周知させた場に違いないことを強く確信させる。コンラート2世の国王選挙や降伏の儀礼の場合と同様、演出は完璧である。その演出が、あたかも事件がまだ未決定で、公にされた決断がいかにも自発的であったかのように見せるのだ。だが、数多くのこれと同じような事例が演出ではないかという疑いを裏付けるし、当事者の一人が取り決めを守らず、そのために申し合わせの細目が史料の

中で取り上げられているとすれば、この演出という疑いは確信へと強まっていくのである。

中世の人々は、デモンストレーションと演出を人間同士のコミュニケーションにだけ用いたのではなかった。彼らは、この方法で神や聖人とも関係をもっていたのである。この重要な分野については、一つの例だけを引用しておこう。『ザンクト・ガレン修道院の事跡』(*Casus St. Galli*)の中で、著者であるザンクト・ガレンの修道士エッケハルトは、明らかに怒りを込めてこう書いている。「アウクスブルク司教であった聖ウルリヒの伝記作者たちは、くだらないことばかり誇張して書いているくせに、広く人口に膾炙している肝心の別のことについては黙して何も述べていない。それはやはり不思議と言わざるを得ない」⁶⁹。後者の事柄として彼が特別に取り上げたのは、ハインリヒ1世の時代にウルリヒが、彼が司教を務める都市アウクスブルクをいかにしてハンガリー人による包囲と破壊から守りきったか、という話だった。すなわち、既にハンガリー人の侵入が迫り、彼らの入城が阻止出来ないものとなった時、彼は「すべての乳飲み子たちを母親の胸から奪い取り、祭壇の前に立つ自分をぐりと囲むように地べたに向けてその子らを放り出せ」と命じた。そして、「子どもたちの震え泣く声の中に彼の涙と悲嘆の声とを混ぜ合わせて、彼は第二のエゼキヤス(ヒゼキヤ)となって、あの恐ろしい敵を追い払った。というのも、野蛮なハンガリー人が都市を放棄し、他の地方に散っていった原因は、その祈禱以外にはないからである⁷⁰。」ここでもまた、話が本当にその通りに行われたか否かは問題ではない。いずれにせよこの話が示しているのは、神との関係であってさえも何が可能で効果的なものと見なされていたか、ということである。すなわち、主に言葉をもって救いを乞うだけでなく、困窮の程度をはっきりと主に見せるということがそれである。司教の祈りと嘆きの声は、乳飲み子たちの震え泣く声——批判的・合理的な見地からすれば、その泣き声は子どもを乱暴に扱ったから生じたとなろう——とひとつになった。二つの声の合一は、神が救いを実際に拒めないほど事態が深刻であったことを示している。

これまで取り上げた様々な事例には、ひとつの共通点がある。それは、それぞれの演者たちが衆人の前で(*Öffentlichkeit*) 新しい状況や新しい事実関係を示したことであり、具体的に言えば、降伏の受諾、君主としての寛大さや公正さといった新国王の素質、あるいは友好的な同盟関係の締結がそれである。そうした変化の局面は、たしかにデモンストレーションと演出がもたらす重要な領域のひとつである。だが、それ以上に忘れてならないのは、中世のコミュニケーション様式が日常においてもまたデモンストレーションの特徴を著しく有していたことである。地位や身分、重用と拒否、寵愛と不興を示すために極めて多様なしるしの体系(*Zeichensystem*)が存在し、これらを利用することが、中世の生活秩序を少なからず巧く機能させていた。これを利用すれば、反応や行動様式は個人の任意の範囲から法習慣の領域へと高められ、そしてそれをますます計算可能なものにした。それが故意によるものであれ過失によるものであれ、ある人物の地位や身分を軽んじれば相手の反発を招き、その応酬は即座にエス

カレートした。それ故、おそらくまさにしるしに対する反応が計算可能になるということは重要であり、必要だったのである。したがって、「名誉をもって(*honorifice*)受け入れられた」であるとか、「溢れんばかりの贈り物で敬意を表された」であるとか、「名誉をもって(*honorifice*)送り出された」といった、しばしば史料に現れる文言を読む時には、そこに一連の象徴的な行為様式を、相手の地位や身分を認め評価するしるしを思い描かねばならないのである⁷¹。同じことは、ある人物の供揃えを伝える文言についても言える。煌びやかな甲冑を身につけた1500の騎士を引き連れて宮廷の祝祭に現れる者は、それだけで十分に自らの「誉れ」(*honor*)を表現したのであって、そのお出ましをことさらに重大事と告げるラッパや太鼓などは、きつとまったく必要としなかったことだろう⁷²。それに対して、宮廷会議に大勢の随伴者を伴って出向くならば、これは即座に威嚇と思われた⁷³。

食事の場合であれ会談の場合であれ、あらゆる席順は、これまた地位や身分を裏書していた。それゆえ、しるしとデモンストレーション行為の体系は、ここでは示唆するだけにとどまるものの、一方では中世的諸秩序の機能を高め、安定的に作用させる特徴をもっていた。

しかし、他方で見落とすことが出来ないのは、儀礼とデモンストレーションが秩序の阻害要因にもなって、後々にまで悪影響をもたらしたことである。しるしは公共圏で用いられるので、大勢の人がそれを見ることになる。したがって、一方に敬意を示す何がしかの行為が他方を不快にさせたとしても、それは驚くに値しない。史料が頻繁に伝える「嫉妬」(*invidia*)は、誰かがあまりにこれみよがしに別の連中から際立って引き立てられた場合の反応のひとつである⁷⁴。
デモンストラターフ
 しるしの使用はそれゆえ、決して個々人の恣意に委ねられていたわけではなく、それぞれのグループ毎に発達してきた序列の観念に従って行われなければならなかったのである。この序列に関してすべての人々が必ずしも同じ観念をもつことがなかったため、これは全くもって厄介な道具であったが、これを用いるしかなかった——中世の多くのいわゆる席次争いは、この問題から火がついた⁷⁵。

重用の特別なしるしが、はじめに詳しく述べた[コンラート2世の戴冠式の]説話によれば、密談であったことは偶然ではない。「国王はしばしば司教を傍らにおいて、助言を求めた」というのは、司教伝の中で出会うほとんどお決まりの文言であるが、それはその時々司教たちの重要性を強調するものである。しかし、君主が側にとりたてて密談するといった重用を表すしるしを、あまりに一方的に序列を無視して用いたならば、その君主は軽んじられたと感じたすべての者たちの猛烈な反発を引き起こした。そうなれば、すぐさま「寵臣の失脚」という結果がもたらされた⁷⁶。

しるしのもつ拘束力は、まずもって相互に相手の反応を確信できるようにした。特定のしる

しはそれに対応するきまった反応を要求したから、もしこの習慣に従わないならば、それはきっぱりと「ほされる」(Aus-der-Rolle-Fallen)ことを意味した。ある種の場合には、習慣に従わないことなどおよそ不可能であった。これについては、これまで同様に事例を挙げてみよう。例えば皇帝ハインリヒ2世はバンベルク司教座を設置しようと計画したが、当初ヴュルツブルク司教の頑強な抵抗に遭遇した。史料が伝えるところでは、教会会議が自分の意図から外れた判決を下そうとした時はつねに、国王が会議で平伏して嘆願することで結果的に審議が継続されることとなった⁷⁷。膝を折って懇願した国王の願いを拒絶することが出来ない、というのが慣習であった。君主は自身をおとし貶めることで、自らの威信のすべてを委ねたのであり、それだからこそ事態が彼に有利になることは必至であった。また他の有力者も、何かを達成したいと思う時に、この手法を用いることを十分心得ていた。

——それは他の者たちにはまったくもって腹立たしいことであったが、この習慣にあっては、たとえ負けても嫌な顔をすることは許されなかったのである⁷⁸。そしてまた、そうした懇願のために膝まづくという行為は、キアヴェンナの重大場面におけるハインリヒ獅子公の前のフリードリヒ・バルバロッサによっても伝えられている。ただし彼は、いくつかの史料の証言に従えば、ここで目的を達成することはできなかった。事実がどうであったにせよ、このような主張がハインリヒ獅子公に対する激しい非難を含んでいたことは明白である。不文律に対する違反の中でも、跪いて嘆願する国王の願いを聞き入れなかったことほどひどい違反はない、と獅子公は非難された⁷⁹。

中世の公的なコミュニケーションにおけるしるしと儀礼的行動様式の偏在し価値が大きいということを視野におさめるには、これまでの説明で十分明らかになったことだろう。しかし、最後にもうひとつだけ重要な問題を提示しておきたい。すなわちそれは、公的なコミュニケーションの上述の規則や習慣において、口にされた言葉が実際にいかなる意味を持っていたのか、という問題である。これについてはまだ十分に応えることが出来ない。しかしながら、公共圏における一連の口頭表現はすべて、ある程度の態度や決断をはっきりと確実に表現する機能を持つ儀礼的発話行為(rituelle Sprechakte)である、という指摘は重要である。だからこそ、多くのそうした表現があらゆる点で誇張され、ほとんど収拾がつかないと言えるほどに極端な印象を与えるのである。そうした表現は、軍事的衝突の際に見ることが出来る。臨戦態勢になると、自分の強さを褒めたたえ、敵の弱さや臆病さを露骨にこきおろした。「間もなく矢の雨で空が見えなくなるだろう」、「軍馬の群れがライン川を飲み干すだろう」、「我々が打ち負かされるのは、ただ天空が崩れ落ちる時だけである」といった文言はこうした実例である⁸⁰。「何か決められたことをするくらいならば、十人の息子を失う方がましだ」であるとか、「何かが起こるまでは、もう髭を剃らない」といった表現やこれに類似の表現は、ある特定の状況におかれた人間が、これらの事態をどれほど真剣に考えていたかを示している⁸¹。逆に、人が「悪しき野心」

(*ambitio mala*)をもっていない、ということも強い言葉で示されている。例えば「拒み、つよく異議を申し立てる」(*Renitens ac valde reclamans*)という常套句は、聖職者が司教職への招聘をかたちの上で謹んで辞退したことを示唆している⁸²。彼が辞退の理由を事細かに申し述べることは、それが本当に司教職を断ることを明確にしなければならない場合にだけ重要だった。紛争の場合にも同じことが言えた。補償を求める時にほとんど型通りに行われたのは、「一方でおもねり、他方で脅迫する」(*partim blanditiis, partim terroribus*)というやり方であり、和解の約束をちらつかせて敵を誘うとともに脅しを掛ける方法であった。つまり、自分の友となるか敵となるかの選択を迫ったのである⁸³。それ故に明確さが期待された。すなわち、譲歩した和解の返答か、さもなければ威嚇的な拒絶の返答かのどちらかである⁸⁴。たとえどんな決断が下されようとも、それが言い渡される時は、これ以上ないほど明確に、我々には誇張しすぎと思えるほどの方法で行われた。しかしながら我々は、そうした表現を儀礼、デモンストレーション、そして公的なコミュニケーションの演出といった文脈の中に位置づけ、それらをこの文脈から理解する必要がある。

これまで論じてきたささやかな事例をもとにして、中世の公共圏におけるコミュニケーションの若干の基本ルールとその特徴を、最後にまとめておこう。中世のコミュニケーションの多くは、言葉を交わすことよりもデモンストレーションによって行われていた。中世社会は身ぶりや儀礼、セレモニー的な行為が持っている大きな可能性というものを自由に使いこなし、それは手間のかかる演出と結び付けられることとなった。この種のコミュニケーションの前提となるのは、——[本番の]光景をイメージできるように——共に演じ、台本や演出家の指示に従うという心構えであった。これと同様に、演示されたものを相応の仕方理解し、それを公にするに適切な形態として受け入れる公衆(*Öffentlichkeit*)の能力と心構えも明らかに存在していた。政治的な力の駆け引きの場では、この公共圏(*Öffentlichkeit*)は、支配・統治の担い手自身、およびその封臣やミニステリアーレンから構成された。つまり、彼らが「人民」(*Volk*)だったのである⁸⁵。そうしたデモンストレーションと演出は空虚な見世物では決してなく、ある極めて実質的な機能を果たしていた。すなわち、それらが演技者たちを結びつけ、誠実宣誓・授封・降伏・恩赦・友好関係・和平締結、あるいはあるグループ内の序列の中で占める地位といった公的に示されたものを守ることを義務付けたのである。その時々当事者自身がこの行動を見て、彼らが将来においてその主君や親族、仲間に助言や援助を与えたことを思えば、公的なデモンストレーションによって得られた拘束力の強さは軽視できなくなるだろう。

しかし、デモンストレーションと演出はすべて、事前の連絡と合意、つまり言葉によるコミュニケーションを必要としている。これは、直接個人的なやりとりの中で実現されるか、あるいは——特に意見が分かれる場合には——仲介者を介して伝えられた。この支配秩序と生活秩序が巧く機能する上で、この仲介者の重要性を強調してもしすぎることはない。ともかく、この

言葉によるコミュニケーションの特徴は、それがまったくもって分かり難い内々の領分に属していることである。あらかじめ路線が定められ、結論が用意されて、デモンストレーションと演出によって公表する計画が立てられたのは、その内々の談合でのことだった。この領分を明瞭にしようとはしなかったことが、中世と近代の相違である。内々に事前の話し合いをもつという領分は、衆人(Öffentlichkeit)の前で行われるデモンストレーションを重視する中世のコミュニケーション様式に本質的に欠かせないものである——この内々の領域がなければ、この中世のコミュニケーション様式など成り立たなかっただろう。これに対して公共圏で話がされる時には、この話は通例儀礼的な性格を持つこととなった。自主的に意見を述べることは、中世のルールには入っていなかった。

何故そうしたルールが発達したのか、そしてそれは諸秩序が巧く機能するためにどれだけの働きをしたのか。最後にこの問題をごく簡潔に論じよう。発展の主要な原因はきっと、アルカイックな社会において地位と「名誉」(*honor*)が持っていた意味の中にある。あらゆる状況で威厳と地位を重んじ、体面を守ろうとする必要性が、少なくとも上層身分に属する者たちにおいては自発的な行動を厳しく制限したのだった。行動は予測できなければならず、予期せぬ出来事は歓迎されなかった。体面を失う恐れがあったからである。このような限定条件が儀式張った行動と演出、セレモニーを助成し、そしてさまざまな問題解決や譲歩を引き出そうとする試みを秘密裏な内々の領分に追いやるのである。しかしながら、誰もがこのルールを受け入れて共に用いる限り、これは諸々の生活秩序が巧く機能することを保証した。この諸々の生活秩序の本質的な限定条件は、中世から近代、そして現代へと変化した、それにもかかわらず中世がわれわれの中にいまなお強く息づいていることは、日頃の経験から知ることが出来る。中世のルールの多くは、必要な変化を加えた上で今もって機能しているのである。我々は、政治やその他の分野で演出やデモンストレーション行動をとる傾向があることも知っている。透明性が求められているにもかかわらず、さまざまなレベルで内々の根回しを行う傾向がある。そして、公職にある人や統治に携わる人を公衆の面前で予期せぬ現実に直面させることは、依然として喜ばれないし、やっかいがられている。そのようなことをすれば、彼らは不意打ちと感じるからである。今日そうした暗黙のルールを犯す者は、「寵愛を失う」(*Huldverlust*)とか「不興を買う」(*Ungnade*)といった中世的概念を当てはめるのが適切な状況に自身がいることを即座に悟るのである。近代化と合理化の過程を経てきたにも拘わらず、近代の公的コミュニケーションの「ルール」は、また「中世が現代に生きている」ことを明瞭に示している。

※ 本論文の註部分の訳は、次号『郡山女子大学紀要』第61集に掲載されます。